

令和元年6月26日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01863

研究課題名(和文)アーミッシュの宗教アイデンティティの形成と消費文化の相互関係

研究課題名(英文)The relationship between Amish religious identity and consumer culture

研究代表者

野村 奈央(Nomura, Nao)

埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：10709588

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：民族誌学的なフィールドワークを主たる研究手法とし、ペンシルバニア州ランカスター郡のアーミッシュ・コミュニティにてフィールドワークを中心とした現地調査を行い、画一的と捉えられがちなアーミッシュのコミュニティ内に存在する多様性の構築に関わる様々な要因を詳細に記述した。彼/彼女らの消費活動から、消費とは一線を画していると論じられてきたアーミッシュが、実際には消費活動が宗教的アイデンティティの構築に大きな役割を担っていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コミュニティに密着した調査を行うことで、文化の実践者であるアーミッシュの様々な消費行動だけではなく、彼/彼女らの消費文化を支える非アーミッシュの行動も調査の対象とし、コミュニティの多様性が生産/再生産される過程を考察した。本研究は、アーミッシュ研究の蓄積に貢献するだけではなく、グローバル化が進む現代において重要とされる文化の多様性の形成過程の一側面を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Using ethnography as a primary methodology, I conducted fieldwork in the Amish settlement in Lancaster, Pennsylvania in order to explore and document various factors that constitute social distinctions within the seemingly homogeneous religious community. In contrast to the existing scholarship that argues that consumer culture is non-existent in Amish society, my ethnographic fieldwork that closely examined Amish consumption activities indicates that consumer culture plays a significant role in constructing and reinforcing their religious identity.

研究分野：アメリカ研究

キーワード：物質文化 消費文化 民族誌 宗教社会学 再洗礼派 アーミッシュ

1. 研究開始当初の背景

私はこれまで、アーミッシュ文化の変容を体現する物質文化に関心を持ち、研究を行ってきた。インディアナ州で基礎調査を実施した後、10ヶ月間にわたりペンシルバニア州のアーミッシュコミュニティで民族誌学的な調査を実施し、コミュニティ内で物質文化が形成される過程を調査した。アーミッシュの家庭に8ヶ月間滞在し、彼／彼女らと生活を共にすることで、アーミッシュの日常生活を詳細に観察した。その結果、先行研究では極めて限定的であると考えられてきたアーミッシュの消費活動が、主流アメリカ社会と積極的に関わりながら能動的に行われていることが明らかになった。さらに、アーミッシュの消費活動を微細に分析することで、地域ごとに消費志向の差異が存在するのみならず、コミュニティ内にも経済格差や社会的地位の差が存在し、それが消費行動に多様性をもたらしめていることが徐々に明らかになってきた。このような背景に基づき、本研究ではアーミッシュの消費文化を研究対象とし、消費文化論の視座から分析することで、学术界においても特定の型にあてはめられて語られることの多いアーミッシュコミュニティ内部の多様性を示すことが重要であると考えに至った。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカ研究における消費文化論を分析の枠組みとし、オールド・オーダー・アーミッシュのアイデンティティの形成と消費文化の相互関係を明らかにする。一般に、敬虔なクリスチャンであり、聖書に則った生活を実践するアーミッシュの「宗教的アイデンティティ」と「消費文化」は結びつかない概念であるが、両者の相互関係に注目することが本研究の特長である。1950年代以降に行われたアーミッシュ研究は、主にアメリカ合衆国において社会学、文化人類学、歴史学の分野で発展してきた。初期の研究では、アーミッシュの社会構造や文化的行為や習慣など、主流アメリカ社会との対比を描き出す形で研究が進められてきたが、近年の研究では北米に点在するアーミッシュコミュニティの地域間の差異や多様性にも注目が集まっている。アメリカ主流社会と一定の距離を保って生活をするアーミッシュ社会では、女性が主体となるアーミッシュの日常生活の研究は容易ではなかった。近年の研究では、父権主義のアーミッシュ社会における女性のエージェンシーへの関心も高まっているが、日常生活と密接に関わる消費活動までは調査がおよんでいない。その原因として、アメリカ主流社会との対比において、アーミッシュを「独特の文化」として描き出すことが研究の中心となり、コミュニティ内部の多様性に対して十分な注意が払われてこなかったことが考えられる。

本研究は、歴史学的な文献調査と、人類学的な現地調査を組み合わせた学際的なアプローチを試みたところにある。特に、アーミッシュの家庭に滞在しての民族誌学的な調査は類例がなく、長期間にわたりアーミッシュの家庭で生活することを許された研究者はいなかった。私がこれまでの調査で時間をかけて構築してきたアーミッシュとの関係性を最大限に生かし、より重層的なアーミッシュ像を描き出すことは、本研究が提示するデータは後続のアーミッシュ研究にも貴重な資料となる。

したがって、研究目的は、一次資料収集と理論的関心の二つに大別される。第一に、民族誌学的手法を用いて、アーミッシュの日常生活を詳細に記録し、今後のアーミッシュ研究に新たな視座を与える資料を作成することである。第二に、これまでのアーミッシュ研究では扱われてこなかった「アーミッシュの消費文化」という主題を採り上げることで、伝統的な宗教アイデンティティの形成と大量消費文化の相互関係という、従来の宗教文化研究に欠けていた視点から分析することである。

3. 研究の方法

本研究は、民族誌学的フィールド調査によるアーミッシュの日常生活のデータ収集とアーミッシュ研究の理論的枠組みの拡大をめざした。具体的には、ペンシルバニア州ランカスター郡やミネソタ州ハーモニー等のアーミッシュ・コミュニティにてフィールドワークを中心とした現地調査を行った。民族誌学的調査では、特に、コミュニティ内部の多様性に注意を払い、画一的と捉えられがちなアーミッシュのコミュニティ内に存在する多様性の構築に関わる様々な要因を詳細に記述し、フィールドノートを作成した。コミュニティに密着した調査を行うことで、文化の実践者であるアーミッシュの様々な消費行動だけではなく、彼／彼女らの消費文化を支える非アーミッシュの行動も調査の対象とし、コミュニティの多様性が生産／再生産される過程を解明することを目指した。

理論的枠組みの拡大では、特に、「神聖／世俗」という二項対立で語られることが定説とされてきた、宗教的消費の枠組みに当てはまらないアーミッシュの消費活動に着目した。アーミッシュの消費活動をできるだけ詳細に記述し、後続のアーミッシュ研究に対する知見の拡張を試みた。

研究を遂行するにあたって、エリザベスタウン大学ヤング再洗礼派・敬虔派研究所主任研究員ドナルド・B・クレイビル氏(社会学/アーミッシュ研究)、ウェストチェスター大学准教授ヤニカン・スマッカー氏(アメリカ史/消費文化研究/物質文化研究/アーミッ

シュ研究)、アルゲニー大学助教授パメラ・ルネスタッド氏(文化人類学)、同大学マット・ミッチェル氏(宗教史)などの専門家と研究会や意見交換の場を設け、問題設定を明確にした。現地調査で収集したデータは、最新のアーミッシュ研究、消費文化研究、宗教の物質文化研究の動向を検討しながら分析をすすめた。

4. 研究成果

ペンシルバニア州ランカスター郡のアーミッシュ・コミュニティでは、インフォーマントのアーミッシュの家庭に滞在しながら、彼/彼女らの消費活動や余暇活動に同行し、民族誌学的な調査を行った。本調査では、第1に、アーミッシュ・コミュニティで現地調査を開始した2010年と比較して、ランカスター郡のアーミッシュ・コミュニティにおける消費活動および物質文化が急速に変化していることが明らかになった。具体的には、大型の太陽光発電を導入した結果、これまで彼/彼女らが使用しないとされてきた全自動の洗濯機、冷蔵庫、掃除機、アイロンやドライヤーなどの家電製品を積極的に取り入れているなど、当初想定した以上に消費文化がアーミッシュの生活に深く根を下ろしていることが明らかになった。

第2に、彼/彼女ら、近年、自らのコミュニティ内で起きている消費活動の変化に無意識であることも、参与観察から判明した。家族関係を重要視するというアーミッシュの宗教的価値観を強化することが名目上の根拠となっている余暇活動では、短期間ではあるものの、行動範囲が近隣のコミュニティに留まらず、遠方まで旅行すること、余剰資産を所有するアーミッシュが一定数存在すること、余暇活動における消費行動が、主流アメリカ社会の保守派キリスト教徒の消費行動に類似している。このような、主流アメリカ社会との類似とそれに対するアーミッシュの意識は、今後さらに調査する必要がある。

第3に、他州のアーミッシュと比較すると、ランカスター郡のアーミッシュの消費行動には、頻度や規模に大きな違いがあることが明らかになった。ランカスター郡では、他の地域と比較して、非アーミッシュをドライバーとして雇い、日常の買い物や旅行へ出かけることが多い。ドライバーを定期的に利用するアーミッシュの家庭には、信頼のおけるドライバーの名前が電話帳に記入されている。さらに一部のアーミッシュは公衆電話や一般的な携帯電話から利用できる「Go Go Grandparents」という高齢者を対象とした配車サービスを利用している。従来の方法では、ドライバーを予約するため、事前に綿密な計画をたてる必要があったが、配車サービスを利用する場合は、より柔軟な外出や移動が可能となる。裕福な一部のアーミッシュに限定されるものの、近代文明の産物である長距離移動を(無意識的に)取り入れている点も、近年のアーミッシュの生活様式の変化として指摘できよう。

余暇活動においても、アーミッシュの宗教観を強化することを名目とした、積極的な消費活動を観察することができた。保守派キリスト教徒が多く訪れるケンタッキー州ピータズバーグに位置する「創造説博物館」は、近年、アーミッシュの間でも人気の観光先となっている。2泊程度のバス旅行で訪れるアーミッシュがいる一方で、ペンシルバニア州からケンタッキー州までドライバーを雇い、余暇活動を行うものもいる。そのためには、家族の旅行費用に加え、ドライバーを雇い、人件費、旅行費を支払う必要があり、アーミッシュが余暇活動にも多大な消費をしていることが明らかになった。博物館という「教育機関」が訪問先であることは、消費活動が正当化され、ギフトショップや博物館に併設されているアトラクションでも積極的な消費活動が確認された。これまでの自身の研究では、アーミッシュの重要な教義のひとつである相互扶助が正当な理由として、チャリティイベント等で積極的な消費活動をしていることが明らかになっていたが、余暇活動においても、消費を通じてアーミッシュの宗教的アイデンティが強化されている過程を観察することができた。

第4に、聖書に基づいた生活を実践するアーミッシュにとって最も重要かつ、神聖な儀式の一つである結婚式においても、消費活動が受容な役割を果たしていることが判明した。アーミッシュの結婚式は、新郎新婦の所属する教会区の教会員、親族、友人を中心に、約400名が招待され、新婦の実家で執り行なわれる。調査者は、調査の初年度から次年度にかけて、主たるインフォーマントのアーミッシュの家庭と十分な信頼関係を構築することができた結果、3年目にあたる2017年11月に、アーミッシュの結婚式への参列が許された。アーミッシュの結婚式は、伝統的な形式に従い、新婦側の家族および教会員が中心となって、会場(新婦の自宅)や食事(昼食、軽食、夕食)の準備をすすめる。新婦側の女性の家族は、結婚式用に同じ生地ドレスを作る。インフォーマントの家族は、調査者に同じ生地ドレスとは異なるデザインのドレスを作ってくれた。

調査者は、そのドレスを着用し、結婚式当日は、朝6時前から夜11時過ぎまで、食事の準備、配膳、参列者の送迎等しながら参与観察を実施した。結婚式で使用する椅子やテーブル、食器のレンタル等、一部のサービスはアーミッシュが経営する事業と取引をするが、食材の一部、装飾品、引き出物等、非アーミッシュが経営する事業とも積極的に取引をする。近年では、ウェディングケーキを注文製作するアーミッシュのビジネスもあり、本調査で参列した結婚式でも、薔薇の花びらが装飾されたウェディングケーキが新郎新婦

のテーブルに飾られていた。参列者からの結婚祝いも、アーミッシュが経営する商店で販売されているようなものもあれば、電化製品等の主流アメリカ市場に出回っている製品も多く見られた。これらの結婚祝いは、一部の参列者の前でお披露目をする時間が設けられており、聖職者によって執り行われる宗教的な儀式に加え、結婚式というイベントにおいて重要な位置を示していることがわかる。新婦の父親が、親として結婚式で果たす重要な責任は「十分な資金があること」と語っていたように、これまでの研究では神聖な儀式として捉えられていた結婚式が、消費文化の一部となっていることが明らかになった。また、新婦の叔母が「近年の結婚式は、招待客も増え、年々派手になっている…それは、(私達が)裕福になってきたからだ」と証言していた。新郎新婦は、結婚式の2ヶ月後にフロリダ州とバハマ諸島でのクルーズ旅行のハネムーンを計画していた。これらのことから、一部のアーミッシュの家庭は余剰資産を形成していることが伺える。

本研究において収集した資料は、引き続き分析を進め、論文等の執筆に取り組んでいる。現在、コペンハーゲン大学で実施された研究会に参加した研究者と共同で、「*Journal of Cultural Economy*」という学術誌へ特集号として研究成果を発表する準備をすすめている。また、*Columbia University Press* より出版予定の編著『*Religion, Attire, and Adornment in North America*』にも、寄稿予定をしている。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計2件)

- (1) 野村奈央 「進化する伝統、多様化する社会」月刊みんぱく、2018年6月号、7-8 (査読なし)
- (2) Nomura, Nao. “Consumption in Practice: Gift-giving as Mutual Aid in Amish Direct Homes Sales.” *New American Notes Online* 11 (2017).
<https://nanocrit.com/issues/issue11/Mutual-Aid-in-Nature-Consumption-in-Practice-Direct-Homes-Sales-as-a-form-of-gift-giving-in-Amish-Society> (査読有)

[学会発表] (計4件)

- (1) University of Copenhagen, Religion, Economy, and Value: Histories Of Religious Fundraising Workshop. “Consumption-based social activities: Benefit sales that strengthen the bond of faith” (2018年12月17日) 野村奈央
- (2) St. Ignatius University Centre, Antwerp (UCSIA) Summer school 2017 'Between Market, State and Religion: Economic Realities, Social Justice and Faith Traditions'. “Amish Material World: Gender, Identity, and Consumption” (2017年8月31日) 野村奈央
- (3) アメリカ史学会 第13回年次大会 (2016年9月16日) 『相互扶助としてのホーム・パーティー: アーミッシュ・コミュニティにおける文化の実践と宗教アイデンティティの形成』 野村奈央
- (4) デザイン史学研究会 第31回研究発表会 (2015年12月06日) 『アーミッシュ・ヴォーグ: 宗教世界におけるファッションの実践』 野村奈央

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

